

盛

装した男たちが大勢、シャンパーニュや葉巻を片手に笑い、楽しそうに語らっている。シャンデリアと真白なテーブルクロスがまぶしい高級レストランの個室で、(アフターディナーのお楽しみ)にしてこの日のメインイベントが始まる。それは…。

靴磨き、である。おのおのが今履いている靴を脱ぎ、それをテーブルクロスの上に置く。ヴェネチアアリネンを指に巻きつけ、ワックスを取り出し、愛おしそうに靴を磨き始める。皮膜ができるのと、少量のシャンパーニュをたらして艶を出していく…。

体力を要するらしく、汗ばんだきた男たちは、上着も脱ぎ始める。靴をテーブルの上に置くことといい、靴下姿といい、上着脱ぎといい、「マナー違反」ばかりなのに、見ていると笑みがこぼれてくる。お行儀の悪い振る舞いがサマになるのは、古来、上流階級の人々だけであった。事実、彼らの多くは「車もお風呂も掃除したことがない」ような、恵まれた立場の方々である。なのに、なぜ、靴を磨くのか？

靴がベルルッティだから、である。この靴磨きの会こそ、クラブ・スワン。始まりは1992年のこと。オルガ・ベルルッティは、自分のデザインしたスリーエールルッティの靴は、特別にこう呼ばれる(の愛好家を招き、パリの5つ星、ホテル・クリヨンでディナーを開催した。マダム・オルガのトークが佳境に入ると、男た

ちのスリーエへの衝動はもはや抑えきれず、たまたま自分の靴を脱いで磨き始めた…という伝説が残る。

スワンとは、ブルーストの「失われた時を求めて」の登場人物。俗世間の価値とは異なる次元に生きる、ロマンティックなスワンの価値を共有する男たちのクラブ、という意味もこめられる。以後、「退屈じゃない」ゲスト同士の交流会が、ホテル・リッツ、プラザ・アテネなどで開催され、2005年11月には東京のジョエル・ロブションでも行われた。



「カワゲ」と命名された荒々しい色づけ仕上げ方法があるほどベルルッティと縁の深い河毛俊作さんは、こんなお話をしてくれた。「色がどんどん変わっていくのが、楽しいよね。ラグビー

やつてた少年時代を思い出すんだよ。1年坊主は、ぼろぼろになったボールを磨かされてね。スピット&ポリッシュ(唾を加えながら磨く、軍隊に起源を発する方法)で磨いていくと、だんだんボールの

を共有する男たちの、特権的な社交の場であることは、わかった。でも、よりによって靴磨きである。何がそんなに面白いのか？

色が変わっていくんだよ。靴を磨きながら、ボールを磨いたあの頃のことも思い出すんだよね…」濃いサングラスの奥に隠されているのは、少年の頃の瞳の輝き。それにしても恐るべきは、ベルルッティの靴である。何が男たちをそこまでさせるのか？

「魔力がある」とある愛用者は言う。また「履いたとたん、禁断の扉を開けた気がした」と話す男もいる。「靴自身が、語りかけてくる」「履いたときの高揚感が」「魂が」「詩が」…それこそあなたたはスワン？ という表現がどんどん出てくる。その秘密は、ベルルッティの靴の美しさだけではないようである。マダム・オルガは「ラピエセ・ルプルゼ」(革につきはぎ

をする!)とか「タトゥアーージュ(タトゥーを入れる!)」など、ぎょうとするほど大胆な作品も次々に発表しているのだ。そんな新作は、マダム・オルガが、「その時代のいちばんダンディな紳士」を想定して作るのだという。冒険的な新作は、「限界にチャレンジしている男性への贈り物」として発表される。

そんな、男を奮い立たせるようなマダムの思いに答えられないようなヤツは、男じゃないつてもものだらう。かくしてマダム・オルガを慕い、彼女の周りに集い、男たちは、靴を磨き始める。そんな彼らを、マダム・オルガは「わたしのシュヴァリエ(騎士)たち」と呼ぶ。ああ、女として一度は言ってみたいセリフです。

Sanctuary of the Lost Samurai

中野香織の“落日のマッチョ”

豪華に靴を磨くマッチョたちは 熱い思いの騎士団だった

車もお風呂も掃除なんかしたことがない、する必要もない紳士が、どうして靴だけは磨きたくなるのだろう。一心不乱に布を動かす姿にうっとり……。

Text by Kaori Nakano



中野香織 (なかの・かおり)

服飾史家・コラムニスト。1962年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得。英国ケンブリッジ大学客員研究員を経て文筆業に。雑誌ライターデビューしてから今年ちょうど25周年。19歳の時の初原稿はメキシコの旅レポートだった。

1 ベルルッティの4代目で現社長のオルガ・ベルルッティと「シュヴァリエ」のひとり。オルガがいるから騎士たちが集まる。2 2006年12月パリのホテル・ムーリスで開催されたクラブ・スワン。3年ぶりの集まりに嬉しそうな表情を隠せない参加者。3 ご自慢の靴を磨き終わって葉巻を一品。4 カメラに向かってびかびかに磨き上げた靴と一緒にポーズ。当然足下は靴下裸足、のはず。



Photos: ©Berluti